

岡村秀典著

『中国文明 農業と礼制の考古学』

許 宏

(向井佑介訳)

本書は、京都大学学術出版会が企画する学術選書『諸文明の起源』シリーズ中の一書である。これは著者が、十余年のうちに発表したいくつかの著作を基礎として執筆したものであるが、そのなかでは、最新の遺跡調査と研究の成果を融合させることで、正しい認識と明晰な見解が導かれている。それゆえ、著者個人の研究にとどまらず、中国初期文明の研究領域全体をまとめあげたものが、本書であるといえるだろう。

中国古代をおもな研究対象としているにもかかわらず、書名では「古代」をはずして「中国文明」としたのは、林巳奈夫のようにシノロジとして中国考古学をめざすべきだと考えたからだという。そこからは、著者が中国文明の継続性を大いに重視していることがうかがえる。また本書では、中国文明を特徴づけるものとして「農業」と「礼制」を重視する。このうち、農業については、世界のあらゆる古代文明は、定住と農耕なくしては興起しえなかつたのであり、ただそれが、アワ・キビやイネの栽培

からはじまっていることに中国文明の特色がある。他方、礼制の存在をもって中国文明を定義し、それが中国文明を理解するカギであると考えた点は、まことに正鵠を得ている。

本書を紹介するにあたり、まずその構成を示し、ついでその概要を章ごとみにみていくことにしたい。

はじめに

第一章 中国文明とは何か

第二章 文明の胎動―紀元前三千年紀の龍山時代

第三章 文明の誕生―紀元前二千年紀前半の二里头文化

第四章 初期国家の成立―紀元前二千年紀後半の殷周時代

第五章 文明・王朝・国家の形成

おわりに

本書の特徴については、著者自身が冒頭にその大要を示している。すなわち、比較文明史の視点から、都市・青銅器・文字などを手がかりに時空をこえて議論を進めることよりも、むしろ四千年の伝統をふまえて中国特有の文明の形成過程を描きだすことを企図したものであるという。中国で流行している「古史研究」としての文化史考古学のように、文化編年をもとに民族の興亡史を描きだすのではなく、農業生産や社会的分業、都市国家論、邑制国家論、都市文明論などの先行研究を批判的に継承しながら、前三千年紀から前二千年紀にいたる中国文明の形成過程を論じることとに重きをおいたのである。このように、文明の形成過程を相当に重視している点からいえば、著者の研究理念はいわゆる二

ユー・アーケオロジと相通するものであるが、それは従来の研究にくらべ、視野のひろい、高い水準の研究であるといえよう。

第一章は、学史をふまえて中国文明の特質を整理し、文明の形成過程をさぐるうえでの本書の立場を明確にしている。四千年にわたって継承されてきた中国文明の骨格をなす概念が「礼制」である。それをまとめた儒教経典は歴代王朝によって重視されてきた。著者は、中国の近代考古学がこのような伝統とは無関係に存在している現状を問題視し、中国文明を正しく理解するためには、考古学の方法だけでなく、中国の古典文献が不可欠であることを指摘する。一方、中国を空間的にみると、その北と南とを対立的にとらえる考え方が根強い。しかし本書は、南北の対比や摩擦をことさらに重視するのではなく、南北軸のみならず東西軸の文化交流が文明形成に大きな役割を果たしたことを強調する。

第二章は、農耕社会が成立し、それが次第に複雑化していく過程を描きだす。前六千年紀までに長江流域ではイネの栽培、黄河流域ではアワ・キビなど雑穀の栽培がはじまった。前三千年紀になると、巨大な城郭集落が出現し、集団どうしの武力衝突も頻繁になり、集団間の階層化と地域内の統合が進行する。集落の内部にあつては、豊富な副葬品をもつ大型墓と副葬品をもたない小型墓との格差が顕在化し、ピラミッド状の階層秩序が形成されつつあつた。なかでも長江下流域の良渚文化では、有力者の大型墓が一般成員の共同墓地から独立し、集団内の階層化が大きく進んだ。良渚文化で盛行した玉器が黄河中上流域で模倣されたように、各地の文化は相互に結びついて大規模な交流網が形成された。

第三章は、前二千年紀前半にいたって二里頭文化を中心とする

広域の秩序が構築される過程を究明する。前三千年紀に各地で繁栄していた諸文化はこの頃までに衰退し、文化間の交流ネットワークが一時的に崩壊して、二里頭文化を中核とする放射状の交流が現出する。その中心となった二里頭遺跡では、はじめて宮城が形成され、銅酒器や玉器を用いた宮廷儀礼がさかんにおこなわれた。それらの儀礼こそが、中国文明を特徴づける「礼制」の初現形態であることを明らかにしたのである。

第四章は、初期国家が成立した殷王朝と周王朝に焦点をあてる。殷周代には多種の作物の輪作が進められ、品種の選択と除草による集約的な農業もはじまった。一方、新石器時代より継続してきたブタ中心の畜産は、殷周代にいたって変容をとげる。黄河上流域ではヒツジを中心とする牧畜へと転換し、長江中下流域では稲作を狩猟と漁撈が補完するようになった。黄河中下流域の農村ではブタ優位の肉消費が継続したが、王都の中核ではウシをはじめとする龐大な家畜が消費され、「礼制」にしたがった肉食儀礼がおこなわれ、ウマ・ウシ・ヒツジを飼育する牧場が王権のもとで経営された。祖先祭祀によって王権の正統性を示す銅鼎がつくられ、王や諸侯の墓地が明確化して死後も王統の継続性が視覚的にあらわされた。このように、農業や畜産などの生業を基盤として、王を頂点とする身分秩序と祭祀体系が確立し、それを有機的に結びつける国家の支配システムが整えられたことを、考古資料や動物遺体の分析、文献史料の検討によってあざやかに復元した。以上の各章をうけて、中国文明の形成過程をまとめたのが第五章である。とりわけ二里頭文化から殷周代にわたる前二千年紀には、社会が大きく変容し、国家形成が顕著に進展した。黄河中流

域では、王権の形成にともなうて都市と農村が分化し、そのことが生業のあり方を規定した。農業と畜産という生業は、国家的な祭祀や軍事の基盤となり、それは王権や国家のよりどころとなった。王権の伸長と国家体制の整備が都市の発達をうながし、王都には支配体制の維持に不可欠な政治・経済・軍事の機能が集中した。このように、有機的に関連する諸要素を分析して描きだされた国家と文明の形成プロセスには、ニュー・アーケオロジーを批判的に継承する著者の立場が明確にあらわれているといえよう。

このB六版、三百ページ足らずの「小さな本」のなかに、中国文明の形成過程が、あたかもパノラマのようにあざやかに描写されている。ここに「パノラマ」ということばで本書を形容したのには、いくつかの理由がある。

まず、既存の研究において重視されてきた社会の上部構造のみにとらわれるのではなく、社会の変化と国家の成立過程を全体として整合的に説明しようとした点である。そこには、下部構造としての「生業」と「生活」、上部構造としての「王権」と「礼制」が含まれる。これを基軸として著者は、中国初期文明の段階的發展にかんする認識の枠組みをうちたてた。すなわち、農業が發展するにつれて、龍山時代には各地で複雑化した酋邦社会が形成され、ついで二里頭文化に「礼は庶人に下らず」という中国文明に特有の上部構造が成立して王朝が初めて出現し、さらに殷周時代には下部構造を包摂する統治システムによりさらに完備された国家体制が確立したというのである。本書の検討により、次のことが明らかにされた。前二千年紀の黄河中流域では、農業の集

約化と数種類の作物の輪作とがすでに普及しており、殷代にいたって、王権のもとで大規模な集団労働が組織され、生産力が大幅に増大した。王権の表象としての宮廷儀礼は先行する二里頭文化において確立し、殷代には農業と畜産の変革により常備軍が組織されて大規模な遠征軍の派遣が可能となった。また、殷周代には征服と諸侯の封建をつうじて新たな人的結合が生まれ、王と諸侯が階層社会の支配者となつて人民を統治する国家システムが整備された。殷周代には王統が確立して王権の正統性を示す宝器がつけられ、祖先祭祀を中心とする儀礼が整えられ、その祭祀儀礼に必要な犠牲の畜産システムが成立した。それはすなわち、「中国の大地において、農業や畜産などの生業と、王権や宮廷儀礼や祖先祭祀などの礼制とが、相互に密接に関連しながら、前二千年紀のなかで社会全体の大きな変革が進行した」（二五八頁）ことを意味している。

この壮大で緻密な叙述のなかで、衣食住など人びとの生活の細部を復元することにも紙幅が多くさかれている。例えば酒の醸造方法や、食肉の消費と犠牲の埋葬にみる季節性などについて、詳細に説明している。また、爵という酒器は、左右非対称である点で特殊な器だが、これは明らかに右ききの人間が用いるものとしてつくられていることを指摘する。爵の持ち方や酒の飲み方については細かな礼儀作法があり、それが千年ちかく継続したことがうかがえる。このような研究は、考古学の特徴と魅力をよくあらわしたもので、著者の鋭い洞察力に感服せざるをえない。

また、中国文明の形成プロセスとその特質を明らかにするため、さまざまな要素について、新石器時代あるいはそれ以前の時期に

までさかのぼって探求している。例えば、水田稲作と雑穀栽培の開始、石製農具や土器の出現、集落の変化といった問題についてである。もともと本書の主題は、中国文明形成の遡源を無限にたどっていくことではない。本書は、社会が顕著に複雑化し、大きな変動が起こる前夜、すなわち前三千年紀の龍山時代に焦点をあて、「文明の胎動」と題する一章をさいて叙述している。一方、その記述は、西周代に下限を置き、さまざまな社会・文化現象の因果関係をうまく叙述している。そこに描かれているのは、時代を通時的に縦断する「パノラマ」であるといえよう。ここで指摘しておかねばならないのは、いま私たちが直面している情報の氾濫である。新たな考古資料が日ごとに増加し、研究領域が次第に細分化していくなかで、研究者の視野はそれに応じて狭くならざるをえず、このように時代をこえて長期的な視野にたった通時的な研究は容易にはなしえないものとなっているのである。

さらに、この目的を達するため、本書では考古学の方法と資料を中心とし、その骨組みに歴史学、動物学、植物学、環境・気候学などさまざまな学問分野の研究成果を加えることで、深みのあるストーリーを読者に提供している。また、随所にみえる世界の他の文明との比較分析は、示唆に富んでおり、そこに著者のひろい見識がうかがえる。

この「パノラマ」のような描写は、著者による研究対象の巨視的な把握の結果であるが、本書の長所は決してそれだけにとどまらない。著者は、海外の中国考古学研究者であるにもかかわらず、本書は決して「書齋考古学」(Amchair Archaeology)の作品ではない。著者が中国の現地でおこなってきた主要な活動をみれば、

一連の研究が堅実なフィールドワークの実践を基礎として組み立てられていることが明らかである。一九九〇年代以降、江蘇省阜寧遺跡・湖北省陰湘城遺跡・河南省府城遺跡の発掘に参加し、山西省東陰遺跡を調査し、遼寧省文家屯貝塚の出土遺物を整理しており、ほかに現地での踏査も数多くおこなっている。これは、中国での調査経験をもつ日本や欧米の研究者のなかでも、群を抜いている。本書が中国考古学の深い理解のうえになっっていることは、山東半島と遼東半島の地域間交流(六二―六七頁)や河南省府城遺跡の発掘(二〇〇―二〇五頁)について、それぞれ独立した項をたてて解説していることから明らかであろう。

最新の資料と情報を収集・把握するうえでも、きわだっている。本書が出版されたのは二〇〇八年六月であるにもかかわらず、二〇〇七年までの資料が収録されており、良渚古城の発見のように、最新の情報までもが含まれている。また、新砦・二里頭・二里岡文化の最新の放射性炭素測定年代を採用するなど、新たな資料や情報に対して新たな解釈をあたえ、従来の理解の枠組みを随時補充している。

さて、中国人研究者としての評者個人の関心についていえば、本書が中国の学界にいかなる影響をあたえるのかという点に集中せざるをえない。

学史的にみれば、一九二〇年代に、西洋の考古学の影響をうけて中国考古学が誕生したとき、それは近代的な学問体系として出発したのであり、それ以前からあった中国固有の金石学や経典礼学を重視する伝統とは、基本的に一線を画するものであった。中

国の学界は一貫して、肯定的な態度をもつてこの学問のもつ特質を受けとめ、学者らは中国考古学が伝統と決別することで科学的かつ新しい学問体系を生みだしたことを強調してきたのである。

傅斯年や李濟、梁思永、夏鼐ら中国考古学の創始者らが、乾嘉学派による考証学の薰陶をうけているがゆえに、伝統文化の影響をある程度とどめていたのに対し、一九五〇年代以来のさまざまな社会思想と教育方針の変動をへて、以後の中国考古学界は、基本的にそのような伝統とは断絶した流れのなかにありつづけてきた。中国がほころぶ伝世文献という貴重な遺産を考古資料と緊密に結合させることで、中国の歴史文化をより深く探求することができるともかかわらず、新しい世代の学者らは、次第にこれらの文献史料を自在にあつかうことが難しくなってきた。それゆえ、西洋近代の考古学の理論と方法を、中国の歴史文化や遺跡・遺物の実態に即して導入するだけでなく、他方で中国固有の学問的伝統を継承し、新たな学問体系をつくりあげた、中国考古学の先達らの姿勢にならうべきだとの提唱が、近年ようやくなされるにいたつた(徐萃芳「中国現代考古学的引進与其伝統」『中国文物報』二〇〇七年一月九日第七版)。

著者自身、研究を実践していくなかで、類似した結論に達している。ほとんどの古代文明が減じさつたなかで、ひとり中国のみは二千年あまり前の社会・文化システムがテキストによつて保存されてきたのであり、それはまことに稀有な財産であるといえる。儒教経典が厳密に史実を伝えているとはいえないものの、それらを完全に無視したのでは、四千年の伝統をもつ中国文明を正しく理解することは難しい。出土文物の編年や分布であれば、考古学

の手法によつて分析することができる。しかし、殷周時代の社会と文化のなかで青銅器と玉器が、いかなる場合に、いかなる組み合わせで、いかに使用されてきたのか、といった問題を明らかにするには、考古学の方法だけでは限界がある。そのような問題をうけて、著者が中国古代の礼書にみえる記載と考古資料とをあわせて、文明形成期の祭祀儀礼にあらわれる犠牲などの問題に深く立ちいって検討を加えたことは、本書の秀逸なる点のひとつである。著者の研究によると、新石器時代から殷周時代にいたるまでの間に、家畜の利用において大きな変化が生じる。それは、ブタだ優位からウシ優位への転換であり、これは礼書において牛—羊—豕の犠牲が社会的地位の高下に応じて利用されたことと符合しているという。そして、そのような変化の背景を、考古資料と文献史料を用いて説明するのが、本書のひとつの特色である。著者は考古学と古典文献学の双方に精通しており、本書ではこれによつて両者の整合的な研究を貫徹することが可能となっている。このように、単純な比較検討を超越した整合的な研究は、今後の研究が進むべき道筋を示しているといえよう。

本書の研究手法のひとつの特色は、微視的研究と巨視的研究との融合にある。農業史や飲食史の研究についていえば、動植物遺体の分析を基礎とし、稲作の起源と伝播、動物の家畜化などの議論に発展させている。ただ、水稲がいかに栽培されたのか、いかなる家畜がいかにして飼育されていたのか、そしてそれらが当時の人びとの生活にいかなる変化をもたらしたのかについては、比較すべき生業や生活スタイルの研究がまだ少ない。文明の形成過程についていうならば、石製農具には顕著な進展がみられないな

かで、生業の変化や農業生産力の発展について従来あまり論及されてこなかった。王都に暮らす支配者と、農民との間に、食物構成のうえでいかなる「都鄙の差」があったのか、現在まで深く追究されたことがない。本書は遺跡出土の動物骨と炭化種子を分析しただけでなく、これらの分析を手はじめに、人びとが口にした肉や米を用いてつくった酒に焦点をあて、その生活様式の通時的変化と階層間の差異をとおして、文明の形成過程を描こうとしたのである。また集落研究については、遺跡の規模と構造をもとに集落の階層を考察するだけでなく、日本考古学の手法を援用して土器などの遺物を仔細に観察し、生活の単位から集落の階層化の問題までを分析している。

海外の研究者であるがゆえに、著者は客観的な態度で中国初期文明の社会文化現象をあつかうことが可能であり、その研究視角と結論は示唆に富んでいる。例えば、歴史的概念としての「中国」とその意味する範囲の変化や、龍山時代の広大な地域で玉器が流通した背景などを、明快に説明している。著者は、黃河流域における「五穀斉備」すなわち固有のアワとキビ、やや遅れて出現したダイズ、南からのイネと西からのムギの導入が、中原王朝が勃興する重要な基盤であったと理解する。新石器時代以降、各地で出現する多くの城郭集落と拠点集落の性質についても、少なからぬ分析を加えている。河南省西山遺跡は単にみずからの集落を防御するために城壁をめぐらした一般的な村落であった。山西省陶寺遺跡では、集落内にピラミッド状の階層秩序が顕在化しつつあったが、大型墓と中小墓とは同じ共同墓地内にあり、大型墓に埋葬された酋長らは集落成員から隔絶した地位にあったわけ

はなかった。湖北省石家河遺跡でも、集落規模の格差を除いては、住居や墓にはその他の集落との顕著な差異がなく、共同体から隔絶した強力な王権の存在を裏づける証拠は発見されていない。一方、陶寺遺跡の状況とは異なり、良渚文化の社会上層の大型墓はすでに一般成員の共同墓地からは独立して墓地を形成し、そこに酋長権力の拡大を読みとることができる。このような鋭い分析が随所にみられる。

王朝の成立については、二里頭遺跡で発見された宮室と礼器などが、西周金文や儒教經典にみえる貴族が規範とした「礼制」の原初形態を示していることを指摘する。二里頭三期にいたって宮廷儀礼、ひいては「礼制」を整えた王朝が成立し、それによってこの時期を中国文明誕生の時期とみなしたのである。山西南部の東下馮文化などには、二里頭文化の酒器はごく少量しかもたらされず、それを用いた飲酒儀礼もその地に根づくことはなかった。これは、二里頭文化の影響がまだこの帯にはいたらず、その分布は二里頭遺跡を中心とする半径百キロ足らずの範囲にとどまっていたことを示している。一方、二里頭文化に起源する土器¹⁰、とりわけ酒器の私たちは遠方に伝えられたが、各地での受容形態は異なっていた。儀礼用の玉璋は広大な範囲に分布したが、それは二里頭文化の中心から周辺への直接的な伝播ではなく、隣接する地域の間を少しずつ情報が伝わり、数ある玉礼器のなかで玉璋だけが選択的に受容された。このように二里頭文化の要素が拡散した現象の背景には、二里頭文化の積極的かつ体系的な情報の発信があったのではなく、各地で主体的かつ選択的に吸収されたと著者は結論する。さらに、龍山時代に各地でさかえた諸文化は相つ

いで衰退し、交流のネットワークが崩壊したのち、黄河中流域の二里頭文化を核とする放射型の交流が形成されるのだという。その中心周辺関係は、支配と従属という強制力を背景としたものではなく、また周辺における文化交流が断絶したわけでもなかったが、二里頭文化の発信力が強まり、周辺地域は絶えず二里頭文化の影響を受けながら、二里頭文化を中心とする体制が形成されていく。その後、黄河中流域は、長期にわたって主導的な地位を占めつづけた。それゆえ、二里頭文化を中国文明の黎明と位置づけたのである。それは、二里頭文化が軍事力を背景として征服・植民によって拡大したとする従来の一般的な見解とは異なり、当時の文化的関係の実情に符合したものと見えよう。

最後にふれておかねばならないのは、本書が必ずしも中国考古学を熟知していない日本の一般読者向けに書かれた書物だということである。専門的で深い内容を平易な文体で説明し、一般の読者にもわかりやすいものとなっている。このような一般読者向けの質のたかい學術書は、中国ではほとんどみられない。しかし中国でも、数十年來の研究成果が蓄積し、学問は成熟の一途をたどっており、考古学者らもようやく自信をもちはじめ、社会的な責任感も強まって、象牙の塔にこもるだけでなく、その成果を社会に還元すべきだとの「自覚」がようやく芽生えてきた。中国でも、Public Archaeology に対する関心が次第に高まってきた。このような状況において、本書のような、海外の研究者による一般読者向けの優秀な著作は、学問の普及という点で見習うべきであり、高く評価される。

考古学は残酷な学問で、新たな発見とそれにもとづく研究により、既往の成果の妥当性がたえず検証される。本書もその例外ではなく、このテーマにかんする段階的な研究成果にすぎない。本書でも、最新の発見によって以前の著作で提示した見解が部分的に訂正・補完されているが、若干の内容についてはさらなる検証が必要である。もちろん、ひとつの優秀な著作として、本書の出版は、中国文明の形成についての研究を推進し、深化させるであろう。そして、中国という一地域における文明形成プロセスの特殊性と共通性を究明することが、グローバル・ヒストリーとしての文明史を探索するうえで、大きく貢献するはずである。

本稿の内容は、「一部全景式解析中国文明形成的力作——評『中国文明 農業与礼制的考古学』」（『中国文物報』二〇〇八年一〇月一日第四版）と題して、すでに中国で公表されている。しかし、この書評を日本で公刊することは、日本の読者にとっても裨益するところが大きいと考え、原文を大幅に増補改訂したうえで、ここに掲載する次第である。

（B6版 二九五頁 二〇〇八年六月）

京都大学学術出版会 税別一八〇〇円

（評者）中国社会科学院考古研究所研究員

（訳者）京都大学人文科学研究所助教